

私のシベリア抑留記

愛知県 河村 廣 康

私は昭和十九年一月二十三日、部落の人たち総出の見送りを受けて、入隊のために家を後にしました。満州の関東軍一九三部隊に入隊したのは二月十二日のことでした。

勝てば官軍と言いますが、ソ連兵の横暴には目に余るものがありました。将校の腕時計でも平気で外してゆきます。また、二、三人で一人の娘を担いでどこかへ連れ去って行くのを見たこともあります。ソ連兵の強奪で持ち物はほとんどなくなっていました。

昭和二十年九月十五日に、「この部隊は、一千五百人をもって第一大隊として、ハルビン以北の鉄道工事を三カ月した後、日本に帰す」とソ連軍からの命令が出ました。部隊長は「間違いない。俺についてこい」と言うので自分たちは喜びました。三カ月経てば帰れ

るといので俄然張り切り切りましたのです。貨物列車に米のカマスをどっさり積み込み、その上に荷物を持って乗りました。

途中の駅で満人が売っている饅頭を砂糖をつけて食べたり、卵や大事に持ってきたカニ缶等を戦友と分け合いました。

しかし物の見事に裏切られ、列車はハルビンを通り越して国境の町、黒河に着きました。みんなは騒ぎだしましたが、何とも仕方がありませんでした。

九月三十日に黒竜江の渡河作業が始まり、とうとう捕虜としてソ連領に行くことが決まりました。どっさり積んできた糧秣の運搬作業は、とても重労働でした。ちっとやそっとでは片付かず、米、大豆、味噌、醬油、乾物類等すごい量。

汗と埃にまみれたボロボロの夏服を着て、ブルブル震えている者たちに会いました。国境でソ連軍と戦った兵隊たちでした。荷物は何も持っておらず、ただ水筒を持っている者が僅かに見えしました。顔は真っ黒で、ろくに食事もしない様子で、痩せ細っています。

た。目が血走りキョロキョロしています。まさに敗残兵そのもので痛ましい限りでした。自分たちが担いで運ぶカマスからバラバラこぼれる米や大豆を、将校の制止の声に耳もかさず、先を争ってかき集めポケットに入れる様は、餓鬼そのものでした。「彼たち苦労しているなあ」自分たちはささやきながら、わざとカマスの破れ口を大きくしました。

渡河した対岸の街はブラゴエンチェンスク。殺風景です。人の行き来もまばらで、たまに馬車を通るくらい。五キロくらい歩いて駅に着きました。「オイよいよ完全に捕虜だぞ」「ロシア人に、こき使われるぞ」「イヤ、食料だけロシアに運ばせて、ウラジオストックから帰すかもしれんぞ」悲喜こもごも口々に言いながら……寒くなると思って多くの衣類を詰め込んだ袋を肩に担いで、列車に乗り込みました。行く先は知らされていません。もうこうなればなるようにしかならないと、みんなはおおかた車中では寝て過ごしました。

もう糧秣も自由になりません。ソ連側が管理し割り

当てで出します。駅に停車すると、線路横で枯れ木を拾ってきて飯を炊き、副食も作りますが、四十分くらいの時間しかありませんからほとんど半煮えの状態で腹に入れました。

列車はウラジオストックと反対方向シベリアに向けて北上して行きます。二段式にしてある貨物車の小窓から外を見ると、白樺と雑木林の中を走っています。バイカル駅に着きました。

バイカル湖畔で飯炊き。ススや埃で真つ黒な顔を、久しぶりに洗いました。水が冷たくて気持ちがよく感じました。ソ連軍の病院列車が駅に停車しました。負傷したソ連兵が窓から自分たちに向かって何かどなっています。枯れ木を集めていると、ロシア人が子供をけしかけて石を投げかけ、私たちに石が当たるのを見て、大人たちは笑っています。畜生と思うが怒るに怒れない捕虜の身、情けないけれど仕方がありません。

十月初めだというのにシベリアは寒く、冷えたハンゴウに濡れた手のひらがピタッと吸い付いて離れませんが、駅で働かされている兵隊の話では、「一日に二、

三列車通るが、奥の方では、鉱山や道路工事で働かされるそうなのと聞かされました。停車する駅々ではロシア人が黒パン、牛乳、タバコなど持って、衣類と交換してくれと言いつけてくるので、「ニエツト（要らない）」と「ハラシヨ（いいよ）」の言葉を覚えませんでした。自分も余分に持っている上着で黒パン一個と交換しました。しかし、この黒パンたるや、黒くて岩塩が入っていてフスマが三割くらい入っているので酸っぱくて辛くてそして苦く、とてもじゃないが食べた代物でないので砂糖をつけて食べました。後で収容所に入って毎日こればかりだと、このパンが美味くなったから不思議です。

十月十日、タイセット第四収容所に到着。ここが目的地でした。

収容所の入り口で荷物検査があり、地図、磁石、武器に類する物、薬品などは取り上げられました。こうした検査はその後一週間置きにあり、その度ごとに持って来た物はだんだんと減ってゆき、一カ月の間に

荷物は全部取り上げられて、とうとう着の身着のままになってしまいました。

この収容所は私たちの来る直前までドイツ人が入っていたそうです。この位置は大きなバイカル湖の西側の中央部にあり、雑木林というより密林が遙か彼方まで続いているところを切り開いて、収容所が作られています。収容所の前を幅十四、五メートルの道路が駅の方まで延びており、反対方向は密林の中に消えています。

松の板を打ちつけた三メートル程の高い塀が周囲を囲み、塀から内側五メートルの間隔を置いてずうっと鉄条網が張り巡らされています。四隅には監視塔が建ち、昼夜を通してソ連兵が、七十二発の弾丸を装填した銃身の短いソ連独特の小銃を肩からつるして見張っていました。

出入口は幅四メートル程で両開きの板張りの扉があり、道路に面した一カ所のみで、その横に小さな出入口がついています。収容所の広さはよく判りませんが、一千五百人を収容しても余裕のあるほどです。

ら、相当な広さです。捕虜收容所になるまでは、ソ連のシベリアでの強制労働をさせる流刑者を收容していたというのですから、全くお粗末なものです。建物も随分古く、屋根は乱雑に削った板葺き、幅七、八メートル、長さ約三、四十メートルの細長い建物です。朽ちかけた丸太を組み重ねたもので、真ん中あたりに板戸の一方開きの出入口、不細工な鉄製のストーブが一つ、粗削りで作った木机が一つ、割り板やそぎ板で作られた二段ベッドが続く寝台床板は勿論凸凹で、ところどころすき間があり、そして照明は薄暗い裸電灯が一つぶら下がっています。したがって部屋の端の方は暗くてほとんど見えないから、たいまつを明かりにしていました。四カ所に小さな窓がありました。その部屋に八十人が起居するのですからぎっしりです。それに毛布は二枚、最初のうちは体が痛くて息苦しくて困りました。厳寒の時期には室内でも零下五、六度です。壁は石灰が塗り付けてあります。これが懐かしの家？です。

ほかに、炊事場、医務室、浴場、便所、ソ連兵の詰

所があります。これらについては後ほどお話しします。

收容所に入ってから階級章をつけて軍隊組織そのままでした。ソ連の将校より大隊長（一千五百人が一大隊に組織されましたから、軍隊時代の部隊長（大佐）が大隊長になりました）が命令を受けて、私たちは中隊長から伐採、製材工場など、それぞれの仕事を割り当てられておりました。

食事

ハンゴウの副食入れ（カケゴ）に擦り切り一杯の飯では腹が満たされません。ハンゴウに雪を入れ、たぎ火で雪を解かしその中に飯を入れます。普通のお粥よりもっと薄く重湯のようにして腹の中に入れ満腹感を味わっていました。副食はバイカル湖でとれた小魚を岩塩で漬けたもの一匹、日本では豚も顔を背けて食わぬほどの、腐った匂いがして口に入れると苦くて辛くて仕方がないほどの代物でした。

中さん（中隊長）が、「そんな食い方をしていると

栄養失調になるから、たとえ僅かの物でもよく噛んで「食え」と言っていました。腹が減って背中にくっつくくらいだから、そんなことは誰もしませんでした。

战友の中には朝食分と昼食分を朝一度に食べて、昼は雪を解かして湯を飲んでゐる人もいました。

敵寒のマイナス三十から五十度以上もあるシベリアでは、外では口に入れる物はほとんどありません。松の小枝の先端部分が少し緑色になっている所があり、その部分を剥ぐと白い柔らかな繊維が見えます。それを採って食べます。休憩時間になると、専らその繊維を食べました。あまり食べて下痢したことも度々。伐採にはノルマ（割当量）があります。それが達成できないと、次の日の食事の量は減らされてしまうのです。

敵寒と言うか酷寒と言いますか極寒のシベリアで、私は大きな発見をしました。ある日のこと、ソ連兵の食料のキャベツを駅までそりを引っ張って取りに行っていたのです。貨車からそりに移すとき、木枠の中の凍っているキャベツが雪の上にパラバラとこぼれます。小

指の先ほどの小さな破片をハンゴウいっばい拾って帰り、雪を入れてペーチカの上でゆでて食べました。そのときのつゆの旨かったこと、甘かったこと。こんなにキャベツが美味しいものとは知りませんでした。戦友たちにも飲ませましたが皆喜んでくれました。今でもその旨さが頭に焼き付いております。口が肥えてしまっている今では、到底その味を味わうことはできません。

米飯は僅か二カ月ほどで、後は大豆、皮付きのコウリヤン、黒パンに変わってゆきました。大豆をゆでたものが主食で、塩ゆでした大豆が副食というのが半年間続いたこともありました。煮たコウリヤンの皮付きのままの物を食べますと、翌日は食べた量のコウリヤンが下から出ます。ほとんど消化していないからです。そして、凝結していて、なかなか外に出てくれません。それで脱肛、痔になって苦しんだ者が随分おりました。私は幸いにも、そうならず済みました。

五月から九月にかけては本当に助かりました。草木が芽生え、巣ごもりしていた動物たちも地上に出て活

動します。天の恵みです。小動物で捕れるものは何でも腹の足しにしました。特に蛇や蛙は大の御馳走です。野草もあらゆるものを口にしましたが、ニラ、アカザなどは御馳走様と言いたいほどでした。

私たちの監督をしているのは流刑者、つまり囚人です。その監督の昼食は、黒パンに冬なら塩魚、夏ならキュウリをかじりながら済ませます。一般の民間人も、それよりよいかもしれませんが、とにかく貧しい国でした。私たちの食事の悪さは仕方のないことかもしれないのですが、しかし、私たち捕虜の食料を配給するソ連の将校が横流しをして、国際法とかで決められている量の半分に満たないのでは栄養失調になるのも当然のことです。

当時、私はタバコを吸わなかったからその苦しみは判らなかつたのですが、タバコの好きな者は大変苦しんだようです。ソ連兵から僅か一服か二服のタバコ（葉ではなく茎を刻んだもの）を貰うのに、何度も何度も頭を下げています。白樺の皮を剥いだもの、松葉、こけ等々あらゆるものを試して吸っていました。

休憩時間に話すのは、食べ物の話ばかり、お国自慢の名物料理、とくに甘い物、牡丹餅やおはぎ、ぜんざいなど。ほとんどが若い兵隊でしたが、色気の話は全くありませんでした。夜勤のとき、休憩所で監督が女とセックスしていても、私たちは興味がなく、またやつてるなどその横で笑っていました。ジャガイモ一つに目の色を変え、タバコ一服にペコペコする。体は骨と皮、あの餓鬼の生活によくぞ耐えて祖国の土を踏むことができた、なんとしてでも生きて帰りたい、父や母に「今帰ったよ」と言いたい、その一念で生きてこられたと思います。

栄養失調や病気で斃れ、今も異国の地に眠る戦友たち……。遙か故国をしのび無念の思いを残して異国の土となった戦友に「安らかに眠れ」とは折れず、唯々合掌するのみ。

虫（ナンキンムシ・シラミ・ブヨ・カ）

囚われの身としての我が家は、ソ連の流刑者かドイツ人の置き土産か、ナンキンムシの巣窟になっていま

した。部屋の装飾というか、板壁に石灰を溶かしたものが塗ってあり、塗ったときは真っ白で気持ちがいいが、一週間も経つと全面赤黒くなります。何故か？私たちの貴重な血のなせるわざです。疲れた体を横たえて就寝すると、間もなく体がかゆくなるので目を覚まし、暗いので山から帰って帰りたいまっつに火をつけると、ナンキンムシがゾロゾロと壁板のすき間に逃げ込もうとはいざり回っています。

ナンキンムシの体は真っ赤になっています。食事の不足と重労働に弱っている私たちの血をたっぷりと吸っているのです。「こん畜生、お前たちまで、俺たちをいじめるのか」というので、逃げ回るナンキンムシを指でブツブツとつぶすのです。すると血が飛び散り、その血がこびりついて、一週間もたつと白壁が一面赤壁になってしまいます。

ナンキンムシはつぶし切れるものではなく、ほとんどは板壁のすき間から逃げてしまいます。やれやれと体を横にします、背中や股の辺りがむずがゆくなります。今度はシラミが活動を始めます。ホントに踏んだ

り蹴ったりです。でも極度の疲労は、ありがたいもので？一晩のうち二、三時間は熟睡できます。

六月初め頃から、ナンキンムシ、シラミに加えて、昼間は蚊とブヨに悩まされます。また、この虫たちは、日本のものと比べると倍以上の大きさです。私の頭は年齢に比例して毛髪もほんの少しになっていますが、当時は髪黒々としておりました。帽子を被っていますが、その上から蚊が刺します。かゆいというものではなく痛いのです。ブヨに刺されますと、見る間に赤く膨らんでくるほどです。

こうして思い出しながら書いていますと、背中の間がムズムズしてきます。

気 候

私がシベリア帰りだと判りますと、「シベリアは寒かったでしょう。なんでも話によれば小便すると、つつつと凍ってゆき、あの先まで氷柱ができて、その小便の氷柱をボキンと叩き折って一物をズボンにしましうと聞きましたか？」なんとまあ。誰がそ

んな話をしたのか。「いやあ、まさかそんなことはありませぬよ。確かに体から出すのですから体温と同じ温度の小便が出ます。そして地上に着くまでに冷えて、少しこんもりとするくらいですよ」と返事をします。

冬は、日本の北海道で暮らしたことはありませんが、緯度の関係からして北海道よりずっと寒いのです。平均してマイナス三十度から四十度くらいだったと記憶していますが、真冬となりますとマイナス五十度くらいときはよくありました。一番低いときはマイナス六十二、三度というときが三、四回ありました。

お話しするときに困るのは、その表現の仕方です。前の話は誇張されていますが、そういう言い方がよいかもしれません。国際法ではマイナス三十度以下になったときはラポート（作業）に出ないことになっていますが、ソ連兵はそんなことお構いなしにビストラ、ビストラ（早く早く）と作業に迫り立てました。外にいますと時間で五分くらいで鼻の頭が白くなって

きます。凍りかけたのです。私たちは普通冷たいとき鼻の頭を横にこすります。しかしそんなことをすると鼻の頭の皮がペロリと剝がれてしまうのです。そのままにしていますと凍傷になり腐ってしまいますから、軽くたたいて血の巡りをよくしてこれを防ぎます。

また、マイナス五十度近くなりますと、体を動かすたびに悪寒が走ります。下着が肌から離れていたのが肌に触ると、わずか一分間くらいに冷えきってしまった下着が肌に触るからです。想像できますか？

小便がしたくなり、ボタンを外して用を足します。終わってからボタンをはめることができせん。手の指に感覚がなくなってしまうので、外すときは案外外せませんが、はめることは容易ではありません。

まつげには氷の花が咲き、まばたきするたびに上と下のまつげがくっついて、まばたきするにも力が必要です。寒いというより痛いのです。凍死するのは、痛い寒いを通り越すと眠くなります。そのままですと、あの世行きになってしまいます。作業が終わり収容所に帰る道すがら、目をうつろにしてふらふらしてつい

てくる戦友がおると、言葉をかけるくらいでは駄目です。怒鳴って頭をたたいたり体を揺すったりして正気にさせていました。それでないと、倒れたら、もうその時は息絶えていますから……。

冬の最中の仕事で一番楽しくて楽なものがありません。それは穴掘りです。穴掘りの作業を命令されると、戦友たちから「やったな」とうらやましがられます。人体二人一組です。冬の土はカチンカチンに凍っていて、ツルハシぐらいでは歯が立ちません。どうするかと言いますと、穴を掘るところの雪をどけて、どんだんたき火をするのです。三、四十分たちますと、たき火を横にどけて、ツルハシとスコップで穴を掘ります。約十センチ掘るのに、穴の大きさにもよりますが一メートルくらいの直径ですと十分くらいです。三、四十分は腰を下ろして火に当たりながら食べ物の話など、よもやま話に花を咲かせることができます。一メートルの深さの穴ですと一日がかりの仕事になります。戦友たちが寒さに震えながら仕事をしているのに比べたら、まさしく極楽です。「戦友たちよ済まな

いね」と。冬季の服装は、軍隊時代の木綿の着下、毛糸の着上下、軍服、オーバー、防寒帽にマスク、軍手に手筒、フェルトの長靴です。それでも耐えられないくらいの寒さです。どんなに寒いか、お判りいただけただしょうか。

春から夏、秋にかけての期間は五カ月ほどです。春になると草花が一斉に咲き乱れ、新緑の木々とマッチして、痩せ衰えた体にも大いに目を楽ませてください。そのころはブヨに悩まされます。辺りが暗くなるほどの大群が襲ってきて恐ろしいくらいです。決して誇張ではありません。事実です。夏になりますとやはり三十度以上になりますが、湿気がないから日陰に入りますとひんやりとして涼しく感じます。しかし今度は蚊の襲来です。暑いからと言って上半身は裸やシャツ姿では蚊の餌食になりますから、暑くても我慢して上着は脱げません。顔は頭からスッポリと細かい編み目のものを被って防ぎます。それでもこの間は食料が野山にありますから、体に元気が出てきます。私たちにとってはありがたい季節でした。とにかく今思い出

しても、冬の季節には、ぞっとします。

ラポート（労働）

仕事をすることをロシア語では「ラポート」と言います。私たちが入った収容所のラポートは、伐採・製材工場が主で、ほかには時々雑用がありました。入所の初めは伐採でした。収容所から歩いて二時間位かかる森林で松を伐るのですが、その山まで行くのが大変な重労働です。何故かと言いますと、道路は凍っていて表面はツルツルになっています。兵隊のときに支給された革の編上靴はソ連兵に取り上げられ、替わりに木下駄の歯のないものに布をタギで打ちつけたというお粗末きわまる靴をはかされていたのです。その木靴の裏も凍ってツルツルになっています。ツルツルとツルツルどうしですから、ピラー（片刃の大きなのこぎり）を肩に、足に神経を集中して歩くのに一苦労も二苦労もしなければなりません。

山に入ったところには足がおかしくなっているのです。山の中は私の胸や首ほどの高さの雪が積もって

ます。指示された松の木の根元まで雪をかき分けなければなりません。そして二抱え以上あるものを二人がかりで伐り倒すのです。一日の仕事量（ノルマ）は二人で三本伐り、枝を払い燃やし、幹は三メートルの長さで切って、一カ所に積み上げる。最初のうちは一本か一本半がやっとなです。二時間かけて山に着き、そして雪をかき分けます。ハンゴウのカケゴに擦り切り一杯の飯（朝も同様）で、ノルマをやり遂げよと言うのは、慣れてきても到底無理なことです。ノルマが達成できないと次の日の飯の量が減らされます。

ただでさえ少ないのに、これ以上減らされてはと思うのですが身体がいうことをきいてくれません。「ビストラ、ビストラ、ヨッポイマーチ（早く、早く、なにをぐずぐずしてるんだ）」と怒鳴るので、「馬鹿野郎、俺たちのような少ない飯でやれるものなら、お前達はやってみろ」と言っていたのですが、後日になって、日本語を少しずつ覚えてくると、そんな言葉言う顔と顔を真っ赤にさせて怒っていました。

山からの帰りは、もうくたくたです。戦友たちと

「いつまでこんなふうにごき使われておらなきゃならんら。いつまでも続くんなら、いっそのこと死んだ方がましだな」と、怒りと不満を話し合っていました。

翌昭和二十一年一月になって製材工場に回されました。ここは山から運ばれた原木を加工します。そしてノコギリ屑などを燃やして発電もしております。おんぼろ発電機ですから、ただでさえ暗い電灯がいつもため息をしていました。私は、原木車下といって、軽便鉄道やトラックで運んできた原木を降ろして、地上に積み上げる仕事です。簡単な仕事ですが、これがまた大変です。車の荷台の両側に原木が落ちないように立てある支えのくいを外して降ろすのですが、外すと同時に原木がごろごろと落ちてきます。ひとつ間違えると原木の下敷きになって命を失うことになりません。降ろした原木を鉄棒でこじたり、持ち上げたりして、積み上げるのです。この工場の仕事は昼夜三交替でした。昼間はよいのですが、夜間は電灯が灯っていない暗がりのところですから、危険度は昼間と違い非

常に高いものになります。昼間は零下三十度前後でも、夜間となると零下五十度以上になります。鉄棒を持つ手は全く感覚がなくなってしまいます。

工場に行くようになって一カ月経ったころ、原木の下敷きになって戦友が一人亡くなりました。私も随分注意をしていたのですが、それからしばらくして原木の下敷きになるところでしたが、幸いにして原木が頭に当たり、その勢いで貨車の下に跳ね飛ばされて、命拾いをしたことがあります。

昼間は明るいから仕事も早く片付きますが、夜間は暗いから倍以上もかかります。軽便鉄道で運んでくるのは次が来るまで一時間以上ありますから、多少は休憩所で暖を取ることもできます。

調子の良いときは三十分くらいで片付きますが、時には原木がいうことをきかず一時間ほどかかるときもあります。そうしますと、降ろし終わらないうちに、もう次の貨車が入ってきます。

トラックの場合は、やつのこと一台降ろしてやれやれと思う間もなく、トラックのライトがピカッと光

り、もう次の車が来るといふ有り様で、少しの休みもなくぶっ続けで朝方まで五時間仕事をすることがあります。厳寒の零下五十度前後の夜、危険におびえて神経をすり減らし、骨と皮ばかりに等しい体で長時間働かされると、体全体の感覚もなく、神経もマヒしてしまいます。危険だという観念もなくなり、無意識の状態で仕事をしている頃には、ものを言おうとしても言葉にならない、こんなときには決まって二、三人の凍傷者が出ます。

ソ連兵は監督から凍傷者が出た報告を受けると、「仕事を怠けているから凍傷になるんだ」と言っていて、収容所内の営倉に入れられます。「ラポート、ビストラ、ビストラ」と働かされるのも地獄ですが、ここは地獄でも一番ひどいところです。火の気の全くないということは、零下十五、六度から二十度くらいの部屋に閉じ込められます。毛布も何もないといい場所です。一日二十四時間、凍えそうになりながら夜も眠ることができず、体を動かしていなければなりません。そうしていないと必ずと言っていいほど凍死してしまいま

す。そのため何十人も亡くなったということです。

五月の末頃になると、先ず迎春花の紫色と黄色の花が咲き始め、しばらくすると短い春を惜しむように色とりどりの花が咲き乱れます。文字通り百花繚乱です。そして夏になると、コルホーズ（集団農場）の仕事が時たまあります。私たちはその仕事を与えられると、「テンホ、テンホ」と大喜びです。ソ連人は個人的には人の好いところがあり、腹が減っているだろうと畑で採れた野菜を食べるとくれます。帰りにはジャガイモなどをハンゴウに入れてくれます。

私たちを監督するのはソ連人の流刑者、つまり犯罪者です。ですから私たちは犯罪者以下ということになります。犯罪者以下ですから、食事もろくに与えず働けるだけ働かす。死のうが、栄養失調になろうが構わないと……。本当に死ぬほどにつらい苦しい労働でした。今の平和で物の豊富さはもったいない程です。この上ない幸せです。

入浴

ラポートラーゲル（作業収容所）では一週間に一回入浴が出来ました。入浴と言っても日本での入浴のように、浴槽にゆったりと身を沈めてホッとするという想像はしないでください。

浴室の入り口で着ている衣類をすべて大きな鉤に通して日本兵の当番に渡し、浴場に入ります。浴場と言っても浴槽なんかありません。もう一人の当番から手桶一杯の湯を渡されます。それで体を洗えと言うのです。浴室は暖房が効いているわけでもありません。みんな震えながら手桶一杯の湯で体を洗わなければなりません。初めのころは顔と手を洗っただけで湯はなくなってしまうました。追加はくれません。しかし、だんだんと要領がよくなり体全部を充分洗えるようになりました。

浴室を出ると小さな部屋があり、カミソリを持った当番が待っています。陰毛を剃るためです。それは毛ジラミの対策のためです。衣類や体につくシラミと陰毛につくシラミとは種類が違います。日本人は陰毛にシラミがつくようなことはシベリアでは絶対にしてお

りませんが、毎週入浴のため剃られるのです。このことについてはこんな話があります。ソ連の軍医将校に日本の軍医が呼びつけられて、「全員入浴のとき、毛ジラミ退治を徹底させるため、陰毛を剃れ」と命令された。そこで日本の軍医将校は、「我々は毛ジラミをもらうようなことは絶対にしていないから不要だ」と抗議したが、聞き入れてくれなかったということで、医務室にいたソ連の兵隊たちは、「これで日本人は毛なしのドラワー（薪）ばかりとなる」と、みんなが腹を抱えて大笑いしたということでした。まことに捕虜とはいえ侮辱の限りでした。

入浴中に私たちの衣類は、滅菌室といってシラミを殺すため高温にした部屋につるされます。その衣服を渡されて着ますが、残念ながらシラミを殺すまでの温度が上がっていないから、シラミは健在でした。

ソ連というところは本当にシラミが多いのです。当時私たちも毎日、何十、何百と退治しましたが、到底退治しきれぬものではありません。収容所内の建物にはしっかりとナンキンムシ、シラミが巣くっていま

す。ソ連人の上流家庭でも、シラミ退治のために衣類を煮沸しているようなことを聞いたことがあります。

満州でも、部隊ではシラミはいなかったが関東軍通信教育隊ではシラミに悩まされ、毎晩班内ではシラミ退治しながら話に花を咲かせたことが続きました。シベリアと比べたら問題なく少ないものでしたが。

栄養失調

私は身体が弱いからと自覚して充分注意していましたが、一年余りたつて、とうとう栄養失調になってしまいました。今にして思えば、残っていた戦友たちには済まなかったのですが、栄養失調になったおかげで早く帰国することが出来ました。

軍隊当時、炊事班にいた戦友が、「今の俺たちの食事では、ただジーンとして生きているだけのカロリースァえない。つまり、俺たちは自分の身を削って生きているんだ」と。前に書きましたが朝に朝食と昼食を食ってもまだ腹は満たされないくらいですから、夕食までは水や湯をガブカブと飲んで空腹をごまかしてい

ます。そういうことから血液が薄くなって栄養失調になるんだと、その戦友が言っていました。

顔や手は、たいまつを灯してナンキンムシ退治をするから一夜にかけての毛穴が変に黒くなりますが、股の付け根からももにかけての毛穴が変に黒ずんできたなら栄養失調の前兆で、だんだん広がってきたら栄養失調です。

栄養失調にはそれぞれ段階がつけられており、一級・二級・三級・OK（オーカー）・ジストロフィー（栄養失調）の五段階でした。ソ連軍の女性の軍医が尻の肉をつまんで等級をつけてゆきます。ジストロフィーが重くなると腰も立たなくなります。三級までは屋外作業にどうやらこうやらの者（ほとんど全員）と一緒に働かされる。それに寒さが加わるから、倒れたら即死ということになります。こういう戦友が次から次とシベリアの土となりました。

私は栄養失調といってもオーカーで、目は落ち込み本当に骨と皮ばかりになりました。ソ連も、これでは役立たずと判断したのでしょう。昭和二十二年四月になって帰国者（復員）の一人に加わり、故国、懐かし

ら略奪してきた齒磨き粉で化粧しており、明るく陽光な人が多くいました。

ダモイ（帰国）

昭和二十二年四月十日の朝、「ダモイだ、準備せよ」と命令が伝達されました。「ダモイ」という言葉は「帰る」の意味です。準備せよと言われても準備するものとして何もありません。昨日と今日の二日間、着替えの衣類だけしかないのに被服検査がありました。やはり帰国させるための検査だったので。検査と言っても小刀を取り上げるくらいのものでした。小刀は、シラカバの木でスプーンや箸など愛用していたものを作るためのものでしたから、ダモイとなれば不要です。一時間もたたないうちに収容所から出発しました。

「おい、俺たちを本当に日本に帰すのかな。ひょっとしたら他のラーゲルに行くんじゃないのか」「まあ日本に帰れるのか何処かへ移されるのか判らんが、ロシアの囚人にこき使われる捕虜じゃなあ、どうされよう

と文句を言っても何ともならんしなあ」「あーあー帰りにーなあ」と言いながらも、ひょっとして帰れるかもしれないと、くぼんだ目は生き生きとして期待に胸膨らんでいました。

黒ずんで布を当てたたよれよれの軍服と外套を着て、雪が氷になっている道を木靴を履いて四キロ先の汽車の乗り場に向かいます。この道も思い出の深い道でした。糧秣を積んだ貨車が着くと、十五人一組で大きなそりを引つ張つての運搬で、麻袋に入った小麦・コウリヤンを八袋から十袋積んで運びます。収容所へ向かうのは上り坂。一日三回から四回やらされるのです。氷の道を木靴では滑って力が入りません。ヨイショ、ヨイショと掛け声は出ますが、四回目ともなるとくたくたに疲れ果てて、「掛け声出れどもそりは進まず」でした。「ビストラ、ビストラ」と囚人の監督がわめき、監視について来ているソ連兵がニヤニヤしてこれを眺めています。ロシア人の子供やおばあさんが、雪の上をバラバラこぼれた小麦やコウリヤンを素手でかき集めカゴの中に入れていきます。満州からソ連領に渡

で平原を走っていた汽車が山の中に入って行くではありませんか。鉄格子のはまった小さな窓に顔を押し付けあって外を眺め、「そうだな、やっぱりだまされたか」「いや、そうじゃない、帰れることは間違いない」「そうだ、そうだ」「でも、ロシア人のことだ、わからんぞ」わいわいがやがや自分自身にも言い聞かせるように騒いでいます。私も「帰れるんだ、絶対に帰れるんだ」と心の中で祈る思いでおりました。しばらくして窓をのぞいていた者が「オイ、海が見えるぞ」と大きな声で叫びました。わつと窓は押し合いへし合い、顔、顔の鈴なりです。「見える、見えるぞ、日本海だ」「帰れるぞ」「お母ちゃん」「子供に会える」と口々に叫びました。

今までずっとだまされ通しでした。しかし今、疑心暗鬼の気持ちは完全に吹き飛びました。間もなくナホトカ港に着くと判りました。

港が見えてきて、汽車は駅のホームに滑り込みました。海岸にバラック建ての建物がずらつと沢山建っています。これは収容所で、第一・第二・第三と三つに

区切られていて、帰国する者は先ず第一収容所に入り、順次第二、第三と移動してゆき、その後、乗船出来る」と説明がありました。しかし私たちが着いたときは三つとも満員で入所出来ず、一千五百人は海岸の砂地に野宿することになりましたが、テントもシートも何もありません。砂浜を素手で穴を掘って二、三人ずつ入って寝ましたが、寒くて眠れたものではありません。夜通し震え明かして、日中の暖かいときに眠りました。三日間の野宿の後、第一収容所に入ることができました。

この収容所は、一番最初の帰国者の中から共産主義者となった連中により「新日本青年同盟」というものが組織され、ソ連監視の下に運営されていて、帰国者に共産主義思想をたたき込むことに努めていました。

朝と晩には「赤旗の歌」を合唱させられ、各中隊ごとに「天皇制打倒」「人民政府樹立」「民主主義徹底」等と書いた幟や旗を作り高唱させられ、これはすさまじいほどのものでした。それは、そのようにしない者がおると「お前は資本主義者だ、軍国主義者だ」と烙印

を押され、再度シベリアに送り返されるからです。実際に送り返された者も大勢いるということですから、もしそんなことになったら大変だと、外面的だけでもそうしなければならなかったのです。

ナホトカへ来るまでの帰還列車の中でも階級章はつけていましたが、駅に着いたとたんに剥ぎ取ってしまいました。他の大隊の大部分はラーゲルにいるときから軍隊はなくなったということで階級章は取ってしまつて、実力のある人（たとえ二等兵であつた人でも）が幹部となり、将校であつた人でも皆と同じ仕事をしていたということでした。私たちの大隊は軍隊時代そのまま、将校、下士官は威張り、ビンタも横行していました。「あの『日本新聞』は嘘ばかり書いている。デマだ」と言っていました。

このナホトカの収容所で一番困つたことは水でした。青年同盟の連中も飲めるような水をと努力をしてきたようですが、おいそれとはいきません。薄黄色に濁っていて変な匂いをする水で、まるで小便を飲むように必ず下痢をします。私も下痢をしましたが幸いに

も入院せずに済みました。しかし、中隊では患者続出して十五、六人が入院しました。帰国を前にして彼たちはさぞ悔しい思いだったでしょう。

この点呼は全くルーズで助かりました。それでラポートラーゲルの点呼を思い出しました。厳しいというか情けない状況でした。ソ連の識字率はどれほどか知りませんが、ソ連兵が数を数えるのには全くのこと頭にくるほどでした。幾度も幾度も数え直し、そのたびに数が違う。早くても三十分くらいかかります。一時間、二時間はほとんど当たり前みたいなものではない。春や夏はよいのですが冬はたまつたものではありません。

こんなことがありました。仕事から帰り、さあ夕食にありつけるとき、点呼のサイレンが鳴りました。やれやれと疲れた体で外に出て整列。とつくに零下三十度は超えています。どうしても人数が合わず、とうとう夜中の十一時まで立たされたときは本当に参りました。このまま凍死するかと思つたほどでした。

話をナホトカに戻します。「民主主義の普及という

が、あれは共産主義でアカだ」と、てんで受け付けな
い者もいたのですが、彼らは熱心でした。民主主義普
及活動は同盟の者が各中隊を回って、民主主義とは・
天皇制とは・軍国主義とは・資本主義とは、などに
ついて説明していました。時折『日本新聞』の記者（ほ
とんどが大学出で共産党に入党している）が来て、な
ぜ日本は戦を始めたのか、なぜ日本は今の状態になっ
たのか、などの話をしました。私は、これらの話は全
部間違っているとは思わず、いい勉強をしました。

五月一日はメーデーで、「メーデーを祝う演説会」
がありました。また、この日はベルリン陥落記念日に
も当たり、盛大に行われました。演説者は八人で、そ
の中に私も入っていました。帰国者五千人を前にして
とうとうとしゃべりましたが、今思うと何をしゃべっ
たのかすっかり忘れており、馬鹿なことをしたと悔や
まれます。

帰国を待つ人は二万五千人、すでに集結していて、
その上、次から次とダモイ列車がナホトカ駅に滑り込
みます。三日に一隻の割で復員船が入港しますが、一

隻に約三千人というので、これはここに当分足止めだ
と観念はしたものの、毎日毎日イライラしていたので
す。幾日かの後、久しぶりに入浴したら、その日に第
二收容所に移ることになりました。第二では演芸団が
組織されていて、演劇もみられ、映画も上映されてい
ました。

ここでの生活は五日間くらいだったと思います。五
月十七日昼頃突然に、第三收容所に移動させられて直
ぐに帰国式が行われました。

赤旗の歌を合唱した後、ソ連の将校が「長い間ご苦
労様、どうか無事に故国に帰り、真の民主主義国家を
樹立して、平和に暮らしてください」という意味の祝
辞があり、大隊長が「無事に帰国したい」と簡単な挨拶。
それから、スターリンに対し帰国できる感謝文？
の朗読があつて閉会。そのまま埠頭に向かいました。

いよいよ忌まわしいソ連ともお別れです。「もう一
遍黒パンが食いたいなあ」と誰かが大きな声で言いま
した。もちろん別れを惜しむ気持ちはさらさらない
が、何か心に引っ掛かるものがあつて素直に喜ばませ

ん。乗船待ちの者たちが「元気で帰れよ」と手を振って呼びかけてくれる、「お前たちも早く帰ってこいよ」と応えました。

六千トンの復員輸送船恵山丸に乗り込みました。乗船者三千二百六人。夕方、ボーと汽笛を鳴らして船は岸壁を離れ、一路故国へ……故郷へ……。

「さーらばシベリアよ また来るまではー」と歌い出しました。「オイオイ、縁起でもないぞ」はしゃいだ声が返ってきて、それから全員の大合唱。欣喜雀躍というか、歌が喜びではちきれそうでした。

船倉は二段ベッドが作られており、その一つにゴロツと横になりました。目を閉じて今までの過ぎ去った苦しい日々を巡らしました。一年と九カ月、短くも長い長い日々でした。この間幾度となく夢にみた父のこと、母のこと、そして一代や忍のこと、友や故郷の野や山のこと、走馬灯のように頭の中を駆け巡ります。その故郷に帰るのだからもつと素直に喜びがわいてこなければならぬのに……。

今こうして復員船に乗って一路故郷に向かっている

ときでも、シベリアの奥地で飢えと寒さに耐えて囚人にこき使われている戦友たちのあの顔この顔がまぶたに浮かんで来て、済まない気持ちたちが交差し、心からの嬉しさ喜びがわいてこないのです。

翌日の十八日、日本海は大荒れで、船は木の葉のように揺れ、一日中船酔い、食事どころではありませんでした。十九、二十日は海は風いで穏やか。両日とも食事もできました。約一年ぶりに米の飯にありついたので。うまかった。

二十一日の午前、「オーイ、鳥が見えるぞ」甲板から叫ぶ声が聞こえてきました。二、三十人がドカドカと上がって行きました。騒々しくなり、私もしばらくして上がりました。陸地に瓦葺きの家が点々と見える。帰った……。

船は元舞鶴軍港に入って行きます。全員が甲板に目白押し。船は止まり、小さな連絡船が女学生を乗せて滑るように行きます。「お帰りなさい。ご苦労様」と、幾つもの手が白いハンカチを振ってくれていました。

小雨が煙るような天気でした。

間もなくランチが来て、それに乗り棧橋に着きました。たくさんの人たちが、「長い間ご苦労様でした。お帰りなさい」を口々に、手を振って出迎えてくれました。

棧橋を渡り上陸して収容所に入り、ここで初めてアメリカ兵を見ました。南方戦線では此奴らと戦ったのかと思いましたが、特別に感慨はわきませんでした。

消毒する粉剤のDDTを首筋から背中に、また前もズボンの中に吹き込まれ、そのうえ何の注射か知らされぬまま四本も打たれました。

宿舎に入り、何年ぶりかと思うほどにゆったりと首まで湯につかり入浴を済ませ、さっぱりとして畳の上になど字になりました。畳の匂いに「アー日本に帰った」という実感が込み上げてきました。復員船の飯も美味かったが、ここでの飯は特に美味く、体も心もはぐれて夜もぐっすりと眠ることができました。

支給された五百円をもって床屋に行き、伸びた頭を坊主頭に刈るように言いましたら、床屋の主人が「いま、日本で丸坊主になっているのは坊さんと刑務所の囚

人ぐらいのものだから、伸びているから七、三に分けたら」と言うので、生まれてから初めて頭の毛を伸ばすことにしました。たしか調髪料は三百円払って、高いのにびっくりした記憶があります。家に電報を打とうとしましたが、「電報より本人の方が早くつきますよ」と言われ、やめました。いろいろな手続きがあり、被服も一揃い支給され帰郷を待つばかりになりました。

五月二十五日の朝、いよいよわが家に帰ることになり、ランチに乗り東舞鶴港に着きました。娘さんがやたらと目につきます。どの娘さんも美しい。日本はインフレと飢餓で惨たんたるものと聞かされていたが、化粧して美しい服装をしている。歯磨き粉を顔に塗り口紅もささないソ連の女性とは大違いだ。やはり女性は日本人に限ると、皆と話し合いました。

あちこちから、「ご苦労様でした」「お帰りなさい」とねぎらいの声が続いてきました。京都駅までは特別に私たちだけの専用列車で運んでくれましたが、ここで普通列車に乗り換えました。その時になって初め

て戦後の貧しさが目につき、「なるほどなあ」と実感しました。買い出しの人々で列車の中は芋を洗うような混雑。大垣付近から爆撃の跡が見られ、内地の人たちも随分難儀をしてこられ、また今でも大変だなと思いやりました。

列車の中では、引揚者促進運動のボランティアをしている学生さんがいろいろと世話をしてくれました。そのおかげで私たちは腰を下ろすこともでき、湯茶の接待も受けました。岐阜駅で下車する戦友たちに「オイ、元気でやれよ」「元気でな、手紙をくれよ」「判った。出すからな」互いに言葉を交わしながらそれぞれの方向に別れて行きました。

一宮駅で戦友たちと別れ名鉄電車に乗り、岩倉駅で小牧線に乗り換え、ここからは独りになりました。日も暮れて夜のとばりが下りてきました。今まで、帰る嬉しさ喜びはあったが心は落ち着いていました。独りになって車窓に映る家々の明かりを眺めているうちに、早く家に帰り着きたい、一分でも早くと、家や父母への恋しさがどっと胸にあふれ出してきて電車のス

ビードの遅いのにはイライラしましたが、やっと小牧駅に着きました。

駅で「間内駅は停車しません」と聞き、知人の床屋に走り自転車を借りました。「ご苦労様だったね。家族四人は元気で暮らしているよ」の言葉の返事もそこに、自転車のペダルを力いっぱい踏みました。

家に着き、戸を開けて「今帰ったよ」の声は上ずっていました。その声を聞いて母が勝手場からよろけながら飛び出してきました。「あああああ」母は言葉にならない声を出して飛びついてきました。互いに声もなく、ただただ涙・涙・涙……。

しばらくして、「おとっつあまは？」「いま前の家に風呂にいつとりやあすで、呼んでくるわ」と母は走りました。すぐに父は襦一つで着物を抱え涙を流しながら駆け込んできました。「よ、よう帰った。よう帰った」声も泣いていました。一代も忍も台所に立ってもらい泣きをしていました。

生きて帰ってよかった。本当に生きて帰ってよかった。

あの大战中は前線も銃後もないと言われておりましたが、ソ連での抑留生活は生き地獄でした。そして、望郷の念に駆られながら異国の土となった戦友たち、死んでいった戦友たちは、作業中の事故で死んだ者もおりますが、ほとんどは、栄養のことなど考えられないほどの少ない食事の量と苛酷な労働、そして酷寒の気候、その三つが重なり合って亡くなり、今でもシベリアの凍土に眠っています。死んでいくのは当然のことですが冬季です。シベリアに連れて行かれた人は六十五万人とも七十万人とも言われています。そしてシベリアの荒野で亡くなられたのはその一割で、六万人とも七万人だとも聞いています。

私が帰国するまでの一年八カ月の間に、私たちのグループの中で五人の戦友が亡くなりました。一人は原木の下敷きとなった事故死、四人のうち昭和二十年の冬に一人、昭和二十一年に三人がいわゆる栄養失調で亡くなっています。亡くなるのは外での長時間の点呼とか、ラポート帰りの途中の出来事です。点呼の途中に戦友が前にバターンと倒れます。目はつむつていま

す。呼んでも、身体を揺すっても叩いても、もうそのときは反応はありません。屋内に二人掛かりで抱え込んでマッサージなど手当てをしても、息を吹き返しません。このような有り様ですと、誰しもが明日は我が身と思わない者はおられませんでした。

晩そのまま寝台に寝かせておきます。ローソクや線香などはありません。戦友の中に坊さんはおらずお経をあげる者とおられません。皆がかわるがわる「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と手を合わせ供養しました。翌朝、製材工場の松の三分板（厚さ一センチ）で棺を作り、着の身着のまま遺体を入れて蓋を打ち付け収容所前の道路を隔てた雪の上に置き、雪を被せておきます。前にも書きましたように土が凍っていて穴が掘れないからです。埋めるのは雪がなくなつて一カ月過ぎ後になります。私はその折の埋葬には行きませんでした。私が、埋葬に行った戦友から聞いた話ですが、棺はバラバラに壊れ、遺体の衣服はビリビリに破られ、遺体も骨ばかりになって周辺に散乱して、見るも無残な姿になっていたということです。新しい棺を作り、

遠くの方にある遺体の一部も拾い集めます。遺体にまとう衣服の代わりはないから、ポロポロになったもので遺体を覆い蓋をしたということです。埋葬を済ませて帰ってきた戦友たちは異口同音に、「冬の間には山犬が狼に食い荒らされたあの有り様を見たとき、ああここでは死にたくねえ。死んだ者にはすまんが、どうせ死ぬなら日本に帰ってから死にてえなあ」と沈痛な面持ちで言ったのが印象に残っています。

そういえば、一人の戦友が友の死を悼んで「戦友」の歌の替え歌で、

ここはお国を何千里 離れて遠きシベリアの
赤い夕日に照らされて 友は野末の石の下

思えば悲し昨日まで

ともにラポートした戦友（とも）が

にわかにはたと倒れしを 我は思わず駆け寄った

潤んだ目をして声を詰まらせ歌ったことが昨日のよう
に思い出されます。亡き戦友（とも）よ……。

皆さんからよく言われます「辛かったろうな。よく生きて帰ってこられたな」「少しも知りませんでした。

本当に大変でしたね」などなど、いろいろと感想を聞かせてくださいました。

手紙をいただいた方もあります。内容の一部を掲載させていただきます。「貴方のこのような体験談を初めて知ったような思いです。それに抑留されていたことは知っていましたが、詳しいことは知りませんでした。そんなひどい目に遭っていられたことは初めて聞く話です。読んでいて涙の出るような思いをしました。苦しい時代があつたのですね。元気で帰ってこられてよかったですね。当時のご両親の喜びようがどのようなであつたか、目に見えるような気が致します。今となつては貴重な体験ですね……」

青春時代のこの体験が私の人生に大きな心の支えになっております。